

「私はこの夏休み、祖母のお使いで買い物に行く事が増えた。祖母が運転め
前許証を返納したからだ。祖母の家の近くのスーパーに行く時、仕事に行く
車の母は必ず左右確認。車道に出ない。」と言う。もちろん、そんな事は
分かっている。母に言われた事や学校の交通安全教室で学んだ事を生かして
歩いてるつもりだ。先日、祖母と一緒にいつものスーパーに買い物に行った時の事
だった。私もシルバークーラーをおいたのだが、祖母の歩くスピードはとても
ゆっくりとした歩みで、おしえてくれたのだ。いつも道路のはずなの
に、私もシルバークーラーをおいて歩いた。祖母に声をかけた。高れい者は注
意力が低下して、祖母に声をかけた。高れい者は注意力が低下して
いると思ったからだ。祖母に声をかけた。高れい者は注意力が低下して
一車に注意して左を見て。さあ行くよ。」
それは付いた。母が運転している言葉だったが、車を運転している人を見て
気が付いた。日本では六十五歳以上の人口は三千六百二十万人、総人口に
割合は、二十九パーセントだ。約三人に一人が高れい者というこ
とになる。私が住む石巻市では、さらに高れい者が多い。でも、祖母が言う通
り、年を取ると目は見えづらくなるし、注意力が低下するし、体も動かしづ
らくなる。私はテレビで見ると高れい者の事故のニュースが頭にうかんだ。そ
して、母の言葉を思い出した。
「気を付けて確認して。ルールを守って。何度も声をかける事で、意識付
けすることができるようだ。それは運転する人にとっても同じかもしれない。
家族が運転できないなど、運転しなければならぬ理由があると思う。それ
でも、家族や近くにいる人が、運転しなればならない理由があると思う。それ
メディアで情報を得たりすることで安全な運転につながるのではないかと思
う。もちろんで情報、安全な道路作りや、運転できなくなった時に利用できるサ
ビスを充実させる事も大切だ。
そして、私にはもうひとつ気になることがある。私の家の近くに保育園があ
るのだが、送迎の車のスピードがけっこう速いのだ。おどろいて母に伝
えたところ、
「朝は超忙しいし、夕方は一秒でも早くおむかえに行きたいからね。」
と母にも心当たりがあるようだ。その後いつものように、
「だからこそ車には注意。必ず確認。」
と言われた。子供も高れい者も働いている人も、みんながお互いを思いやつ
てルールを守り、安全にくらせる社会を作りたいと思う。

「こつちゃんが事こにあつたよ。」
わたしは学校から帰つて来た時に、お母さんからそう伝えられた。三年前のハロウインの日の朝、うち園バスを待つてゐる時、わたしの妹のこつちゃんは自転車にぶつかり、こつちゃんの右うでが自転車の前車輪にまきこまれた。事この場所は、四メートルくらいの歩道で、車道は車が多く、ごみしゅた集車が止まつたりして、自転車が走るのはあぶないので、自転車はみんな歩道を通る所だ。朝八時半ころ、こつちゃんとお友達が園バスを待つてゐて、お母さん達は子ども達から少しはなれた所でお話をしていた。こつちゃんが、お母さんの所にかけよつて来ようとした時に、走つて来た自転車がこつちゃんをよけようとしたけれど、よける事ができずにぶつかった。自転車の運転手は、十九才の男の人で、学校に向かつていると中だつたらしい。お母さんは、けいさつときゅう急車をよんだ。
「こつちゃんは、大じようぶなの。」
と私がお母さんに聞いたら、
「病院で、いじようはないと言われたよ。」と言われ、私は少しほつとしたけれど、やつぱり不安だつた。わたしはその時は、自転車の運転手が悪いと思つたし、けいさつの人とも、自転車の運転手のふ注意だと言つていた。自転車の運転手は、わたしの家に家族と来て、何回もあやまつた。
わたしは三年前は、自転車の運転手が悪いと思つていたけれど、今は考えが變つてきた。こつちゃんは、歩道にいたけれど、周りを見ていなかった事が變かつたと思う。自転車の運転手は歩道をゆつくり走つていて、交通ルールを守つていたけれど、うち園の子は何をするか分からないから、もつとどう動くかを考えるべきだつた。おたがい注意不足だつたんじゃないかと思ふ。道路では、相手がどう動くかを考える事が大事だと感じた。
自転車の運転手は、スピードを出してゐなかつたから、こつちゃんのけがは軽くすんだ。「けががもつとひどかつたら、けいさつにつかまえてもらつたと思う。運転手の人生もまだ続くし、反省してゐたからゆるせたよ。」とお父さんは言つた。
この間学校で、七夕の短ざくにならぬなく「家族が元気でいられますように」と書いた。なぜそう書いたか深く考へてみると、こつちゃんの事がいつとも心に残つてゐるからかもしれない。朝、いつてきます、と言つて家を出た人が、交通事故こでもう家に帰つて来ないかもしれない事はとても悲しい。わたしは、こつちゃんがいるから、子どもの動きが分かる。わたしは、自分分たいたな事を小さい子の家族にけいけんさせたくない。「わたしは、もう、小さい子を守る立場になつたんだな。」と思つた。

小学校4年生～6年生の部

* 作品は原文のまま掲載しています。

宮城県教育長賞

福島旅行とシートベルト

石巻市立釜小学校 五年 渋谷 茉耶

私はこの前、家族で車に乗って遠出しました。車の中から町を見ていると、信号を無視して横断歩道を渡る人や、スマートフォンを見ながら自転車の乗っている人を見かけました。そのたび、父は、「ルールを守らないと事故になるんだよ」と教えてくれました。

私は助手席に座っていて、シートベルトをしていなかったらどうなるのかを父に聞きました。すると、「急にブレーキをかけたら体が前に投げ出される。シートベルトは命を守る大切なものなんだ」と言われました。

それを聞いて、私もシートベルトの大切さを改めて知りました。車に乗っているとき、運転している人がどれだけの周りに気を配っているかが分かります。父は交差点の手前で必ず減速し、「人や自転車が出てくるかもしれない」とつぶやきます。私はそれを見て、車の運転する人にとって、ほんの一瞬の油断が大きな事故につながるのだと思いました。

私は普段歩いて学校へ行きます。歩行者は「青信号だから大丈夫」と思いがちですが、実際は車が信号を見落としているかもしれません。だから、青信号でも左右をよく見てから渡る事が必要だと分かりました。自分の身は自分で守らなければならないのです。

また、この旅行で気づいたことがあります。それは「思いやりの気持ち」が交通安全につながるということです。父は「どうぞ」と言って横断歩道の前に止まって歩行者を先に渡らせました。そのとき歩いてた人が軽く会釈をしているのを見て、私までうれしくなりました。ルールを守るだけでなく、お互いを思いやる気持ちが道路を安全で気持ちのよい場所にするのだと感じました。

この経験から、私は次のことを心に決めました。第一に、車に乗るときは必ずシートベルトをすること。第二に、歩行者として信号を守るのほもちろん、青信号でも左右をしっかり確認すること。第三に、相手を思いやる気持ちを忘れずに行動すること。

交通安全は、毎日の生活の中で少し気をつけるだけで守ることができます。でも、その「少しの注意」を忘れてしまうと、大きな事故につながることもあります。だからこそ、私は今日からも気を引きしめて行動したいと思っています。

家族との旅行で学んだことを忘れずに、これからも自分と周りの人の命を大切に、交通安全を守っていききたいです。

一般社団法人宮城県交通安全協会会長賞

危機を感じて

涌谷町立涌谷第一小学校 六年 佐々木 花菜

私の小学校では毎年、交通安全教室があり、道路の正しい渡り方や、事故の危険性を学んでいます。その教室では自転車の乗り降りの仕方、踏切の渡り方、自転車の点検の仕方も教わります。実際に自転車に乗って、校庭を走ってみたりもします。そして、夏休み前も交通ルールや自転車の乗り方について再度話されました。夏休みは自転車学校の勉強会に行ったり、近くのお店まで出かけたりので、自転車に乗る機会はずいぶん多くなります。ですが、急に止まれないで、スピードを出しすぎてしまったり、危ないと思う事も度々ありました。

そのうちのひとつは夏休みに行われる学校の勉強会に自転車に乗って向かっていたときのことです。途中の緩やかな坂道を自転車で行くと、思ったより勢いがついて少し前にあったポールにぶつかりそうになりました。とっさにブレーキをかけてたので、ぶつかって怪我をすることはありませんでした。もしブレーキが壊れていたらポールにぶつかって怪我をしていただろうと思います。この体験から、坂があるときはスピードを落とすように走らなければならないと感じました。

もう一つは、横断歩道を渡ろうとした時のことです。左側が壁で隠れていて、車が来ていることに気づかず、そのまま渡ろうとしてしまいました。少し前に出てみると、左側から車が来ていることに初めて気づきました。あわてて後ろに下がりました。壁などがあって、左右がよく確認できないときは、身を前に出して確認すること、左右をよく確認でき話を受けた事を思い出して、そこから左右を良く見て渡りました。左右をしつかり確認することは、これから事故にあわないように忘れずに行いたいことです。

小学生の一年間の平均事故件数は約千件前後とも言われています。その割合が歩行中、三割が自転車乗用中だそうです。一、二、三年生などの低学年の交通事故が多くなっています。主に飛び出しや横断違反などが原因で事故が起こっています。ですが、小学生の事故件数は毎年減っていて、良い傾向にあります。二十五年上半期では小学生の事故による死亡がゼロ件となっていて、一人一人の安全への心がけがこのような数字で表されるとうか。交通安全は防げるものです。少しでも事故の件数を減らし、そして、安心安全な社会を目指していきたいと思っています。

小学校4年生～6年生の部

宮城県PTA連合会会長賞

大和町立吉岡小学校 五年 土居朝柊

ぼくは、この前宮城県の交通事故のことを調べました。その中でいちばん多かったのは追突事故で、全体の四十二パーセントをしめていることを知りました。事故の半分近くが追突だと聞いて、とてもおどろきました。追突事故は車と車のあいだで起こるものだと思っていました。歩行者や自転車も巻きこまれることがあると知って、あらためて交通事故のこわさを感じました。

ぼくの通学路は国道をはさんでいて、近くにインターチェンジもあるの
で、朝も夕方も車通が多いです。信号が青になって横断歩道を渡ろうとし
たとき、車が止まらずに走っていったこともあります。そのとき「もしも自
分が渡っていたら」と思ったら、ムネがドキツとして足がふるえて、動けな
くなりました。歩行者をゆう先しない車が多いことに気づき、事故はいつ自
分の身近に起きてもおかしくないんだと感じました。

また、家の近くのスーパーのちゅう車場でも、スピードを出して走る車
を見かけることがあります。ちゅう車場は買い物にきた小さな子どもやお年寄
りも歩いている場所です。ほんの少しの油断が、大きな事故につながってし
まうと思います。ぼくはそのような車も見ると、運転する人には「自分の
家族や友だちがそこを歩いていたらどう思うだろう」と考えてほしいと思
います。

けれども、事故をなくすために気をつけるのは運転する人だけではありま
せん。歩行者のぼくたちも安全を守る努力がひつようです。ぼくは青信号に
なってもすぐに渡らず、「右、左、右」をかくにんしてから渡るようにしてい
ます。

家族で出かけるときも、ぼくから「シートベルトをちゃんとしめた？」と
声をかけることがあります。安全に気をつけるのは自分だけじゃなく、まわ
りの人に呼びかけることも大切だと思います。友だちと歩くときは、ふざけ
ながら道を歩かず、前を見て歩こうと声をかけます。

交通事故のニュースを聞くと、「自分は大丈夫」と思ってしまうんです。
でも、事故は誰にでも起こります。起きてからでは取り返しがつきません。
だからぼくは、まず自分が交通ルールを守ること、そして周りにも声をかけ
るようにしていきなさいです。

追突事故がなくならないのは、運転する人が「少しくらい大丈夫だろ」と
思ってしまうからだと思います。歩行者も「まだ赤だけど車が来ていないか
ら行こう」と思ったらきけんです。ひとりひとりが気をつければ、事故はき
つとへると信じてます。みんなで事故のない明るい社会を作っていきたいで
す。

合 計 98 作品